

## ■ワーグナー／

### 楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」より“第一幕への前奏曲”

《ニュルンベルクのマイスタージンガー》は中世の終わりごろ、ドイツで活躍した実在のマイスタージンガー（親方歌手）を題材として、芸術のすばらしさと崇高な精神性を描いた楽劇である。同じリヒャルト・ワーグナー（1813—83）の《トリスタンとイゾルデ》と比べると、内容ばかりでなく、音楽も調性感があって親しみやすい。台本の完成前に書き始めたといわれる第1幕への前奏曲は、本編に出てくるライトモチーフ（示導動機）を提示しながらオペラへの期待をあおると同時に、ソナタ形式に類似した構成となっている。

堂々と高らかに奏でられる冒頭の大長調の主題が「マイスタージンガーの動機」で、親方たちの威厳に満ちた姿を表象している。続いてフルートのパートに「求愛の動機」が示されたあと、第3幕での親方たちの入場の際に流れる「ダヴィデ王の動機」が威厳をもって奏でられる。やがて「芸術の動機」が第1ヴァイオリンに現れ、ここまでがソナタ形式の第1主題。続いて静かで穏やかな楽想となり、第1ヴァイオリンが「愛の動機」を提示する。これに続くのが展開部で、バックメッサーがおかしな歌を披露してしまう場面の軽快な主題と笑いものにされる場面の主題が用いられる。再現部ではマイスタージンガーの動機、ダヴィデ王の動機、求愛の動機が立体的に重ねられてクライマックスを築き、再び明朗なマイスタージンガーの動機が輝かしく鳴り響く短いコーダで終結する。

白石美雪

#### 楽器編成

ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、シンバル、ハープ2、弦五部

※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。